

市史編さんだより



(31)

東山道武蔵路

今年に入って、国分寺市の旧国鉄中央学園跡地から古代の東山道武蔵路の遺構が発見されて、大きな話題となりました。六四五年の乙巳の変、いわゆる大化改新にはじまる中央集権的な古代国家形成の歩みは、律令体制として天武・持統天皇の時代にその骨格がほぼ完成しました。中央と地

方の行政制度の整備にもなっており、全国は畿内と七道に区分され、さらにそれぞれ国に分割された。そして、中央と地方を結ぶ道路として駅路が整備されましたが、それが東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道です。東村山市が属した武蔵国は、当初、東山道に入っていました。東山道は、

その名の通り、畿内より東の山地を中心とする地帯におかれました。近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野という、これら海に面しない山国をとおって、陸奥・出羽国へと至るのが東山道です。そして、海に面しているにもかかわらず東山道に属した武蔵国には、上野国新田駅（群馬県新田町付近）から武蔵国府（東京都府中市）まで往還路が設けられました。それが東山道武蔵路です。

この東山道武蔵路が、今回の旧国鉄中央学園跡地の発掘調査では、幅12mで東西に側溝をもち、長さ330mにわたってほぼ南北に一直線に検出されました。過日、私も遺跡を見学して、古代の駅路が目的地に最短距離で到達できるように、直線的路線をとって計画的に配置されていたことを、まさに眼前で実見することができて、その壮観な姿に感動すら覚えました。

ところで、東山道武蔵路は、隣の所沢市久米の南陵中学校の校庭からも発見されており、狭山丘陵の八国山からは、切り通しの跡などが確認されており、まことに、東山道武蔵路は、当時の入間郡から八国山を迂回して、多摩郡の地に入っており、そこからほぼ真南に一直線で武蔵国府まで至ったものと想定されます。そうであるとするならば、東村山市内では、府中街道の東脇を東山道武蔵路は走っていたものと思われ、今後、市史編さんの事業で、市内からも東山道武蔵路の遺構を発掘調査できたら、市民の皆さんにもその壮観な姿を見ていただけるものと考えております。

原始担当 勅使河原彰